

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 3 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770185

研究課題名(和文)日本語教師養成を前提としない大学教養科目としての日本語教育学プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of a JSL Program as a Course in Liberal Arts for Students of Various Field

研究代表者

鈴木 寿子(SUZUKI, Toshiko)

早稲田大学・日本語教育研究センター・その他(招聘研究員)

研究者番号：00598071

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は「大学生のための持続可能性教育としての日本語教育学プログラム」の開発である。異文化学習の方法「対話的問題提起学習」と、他者への共感的理解を養う自己カウンセリング法「ロールレタリング」の2つの技法を、日本語教育副専攻科目および日本語教師研修で用い分析した。その結果、人々の生き方を知る教材や議論で思考が深化されたこと、学びの過程で想像力が発揮された「ことば」、想像力の基点となる「自己」が獲得されたことがわかった。また、本プログラムでの2つの技法の併用により、非日常の言語活動による「実践知」の可視化、主体的な話題選択や価値観・アイデンティティを含む自己開示ができることがわかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a Japanese as a Second Language (JSL) program as a course in liberal arts for students of various field. The developed program focus on not only for a class in liberal arts department but also for practicing JSL teachers. Problem-posing Learning and Role Lettering are chosen and parallely used in this program. The results show that the discussion over globalization and the diversity in this program brought the participants' deeper awareness of today's society. In the learning process of the program, participants developed the ability of expression and confirmed the self which was the origin of the imagination and capacity to empathize. The combine use of Problem-posing Learning and Role Lettering forms the basis of the program enabling the participants to visualize the practical knowledge by offering the mood of intimate conversation with self-disclosure.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 対話 協働 言語生態学 成人学習 成長 自律 内省

1. 研究開始当初の背景

近年、国内の人口減少や経済のグローバル化など、急激な社会変化が著しい。国境を越えた人の移動が活発化する中で、労働者、配偶者、子ども、留学生等、多様な人々が来日し、日本語を学ぶようになった。

在日外国人の増加とともに、移民や留学生受け入れなど、日本語教育に関係の深い政策が盛んに議論され、学習者のニーズに柔軟に対応できる日本語教師の必要性が高まる一方で、職業としての日本語教師の不安定性は際立つ。それは、国内の日本語教師約 36,000 人のうち、非常勤は 28.5%、常勤は 11.5%にとどまるという数字にも表れている(文化庁 2015)。また、常勤の日本語教師であっても、あらかじめ任期の定められた雇用形態が目立つ。こうした環境下では、日本語教師が精神的、経済的なゆとりをもって、職業上の能力をはぐくんだり、日本語教育を通じて日本社会に果たせる寄与について考える力を養ったりすることが困難となっている。

日本語教師や日本語学習者に限らず、国内外の多くの人々が雇用やライフコースの揺らぎを経験している現在、日本語教育場面で日本語の学習のみならず、グローバル化社会で何が起きているのか、なぜそのような事態になっているのか、そこでどう生きていくかという問いに取り組む場に変えていく必要がある。

筆者は、日本語教師および日本語教師志望者を対象に《持続可能性教育としての日本語教師教育》を行い、グローバル化社会の現状や自己の役割に対する理解や生き方の探索、意志の獲得がなされる過程を実践研究によって明らかにしてきた。具体的には、日本語教育に関連が深く、グローバル化社会を反映したテーマ(例：留学生の日本就職、外国人の子どもの教育問題)をディスカッション等の協働学習で学ぶ実践を行った。分析の結果、参加者は対話によって今社会で起きていることへの理解を深め、いかに生きるかを探索していることが明らかになった(唐澤・小浦方・鈴木 2013)。また、学習の際に参照されるのは日本語教育上の知識よりも、母国や家庭の状況等その人自身の背景であり、こうした学習によってグローバル化社会で能動的に生きる意志が形成されていた(鈴木・トンプソン他 2012)。この点に着眼すると、本教育の対象を日本語教師教育に限らず、グローバル化社会を学ぶ人々への教育に汎用できる可能性が見えてきた。

2. 研究の目的

グローバル化競争は日本国内の大学生にも影響を与えている。企業は社会人基礎力を持つ即戦力の人材を期待し、大学生の就職活動は早期化・激化している。その結果、大学教育現場では、学業より就職活動が優先される等の事態が起り、大学生が自己を取り巻く現代社会の仕組みや、世界的情勢を理解し

たり、卒業後のライフコースを思考したりする時間を確保できないまま競争にさらされている状況がある。日本語教師と大学生に共通しているのは、グローバル化社会の影響を受けやすくも、即戦力として活躍を期待される点に加え、研修・学習の機会がトップダウンになりがちで自己探求的な学習が欠如している点である。

そこで本研究では、日本語教師に対するプログラムを大学生対象に改編し、グローバル化、日本語教育学、自己を協働で学ぶ、大学生のための「持続可能性教育としての日本語教育学プログラム」を開発する。このプログラムは大学教育用として開発すると同時に、現役の日本語教師に対しても得るもののあるプログラムになるように作成することを目標とする。それにより、大学生が現役日本語教師と共に学ぶことができ、さらには、日本語教師になる前から、日本語教師になった後まで長期間、一貫して活用でき、自らの考え方、価値観の変化が可視化できるような、生涯学習としての強度を備えた汎用性あるプログラムの開発を目指す。

3. 研究の方法

本研究のフィールドは、(1)大学生対象の日本語副専攻科目と、(2)日本語教師の自律研修の2つである。

筆者のこれまでの研究の蓄積から、内省の深化および認識の拡大に有効なツールとして「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」を、2つのフィールドで共通して用い、持続可能性教育としての日本語教育学プログラムの骨格となるツールとすることとした。

(1)大学生対象の日本語副専攻科目では、早稲田大学で全学対象の日本語教育学副専攻科目「グローバル化社会と日本語教育」を対象とした。同科目は平成 26 年度、27 年度に開講された。

(2)日本語教師の自律研修とは、筆者が日本語教師仲間 2 名とともに立ち上げた自主的研修グループを対象とした。

表 1 2つのフィールドの概要

フィールド	実施時期	対象者	学びのツール
(1) 大学生対象の日本語副専攻科目	平成 26 年度、27 年度	履修者 55 名(26 年度)、14 名(27 年度春学期)、47 名(27 年度秋学期)	対話的問題提起学習とロールレタリング
(2) 日本語教師の自律研修	平成 23 年~28 年	日本語教師 3 名	

上記2つのフィールドにおいて 持続可能性教育としての日本語教育学プログラムで学ぶテーマを選定し、それを「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング」を使用して、受講者が理解を深める展開を分析した。

なお、対話的問題提起学習とロールレタリングの概要は以下の通りである。

対話的問題提起学習とは、共感的態度で自分と相手の感じ方、考え方を理解し、対話を通じて人間的なつながりをつくるための異文化学習の方法である。元々はウォーラーステイン (Wallerstein 1983) により「問題提起学習」の名で識字教育の方法として導入され(岡崎 2009)、その後、岡崎・西川(1993)での改変を経て、より明示的に対話性を加えた「対話的問題提起学習」として主に異文化学習の場で用いられている。

ロールレタリングは、自分自身が自己と他者との双方の役割を演じて、書簡によって交換する心理技法であり、個人がまず他者へ向けて手紙を書き(往)、次に他者の立場からその手紙に自ら返事を書いていく(復)という自己カウンセリングの1つ(岡本 2007)である。臨床心理の場で導入され、現在では、学校教育や看護、福祉の現場でも広がっている心理技法であるが、岡崎(2009)では、これを生態学的リテラシー育成のための学習方法として取り上げている。

4. 研究成果

本章ではフィールドごとの研究成果を報告する。

(1) 大学生対象の日本語副専攻科目

ロールレタリングの手紙の展開によって、実践の学びに差異が生じる可能性がわかった。(学会発表 に詳述)

日本に暮らす台湾出身の母親が、日本で、日本語を用いての子育てで感じている困難が綴られたテキストで、この母親へのロールレタリングを行った。その結果、大学生が書いたロールレタリングにはいくつかのタイプがあった。母親の苦境に迫り、母親の感情が再現されたロールレタリングが展開される一方で、単調なねぎらいと感謝のやりとりにとどまるロールレタリングも見られた。その違いを産み出すものは、「(相手とは異なる)自分の考えを述べること」や「質問すること」といった、相手に向き合う言語行動であった。ロールレタリングの「往」で、そうした言語行動がなかったものは、「復」で、「ありがとうございます」「助かりました」「参考にします」「がんばります」など、そこでコミュニケーションが終了してしまうような返信となり、その結果、気付きの少ないロールレタリングで終了しがちであった。

このような結果となった背景には、コミュニケーションの円滑、円満を求めるあまり、コンフリクトが起こりやすい言語行動を大学生が避けた可能性がある。こうした配慮は日常生活でのコミュニケーションをスムー

ズにしやすい一方で、自分とは異なる他者の視点や認識の獲得を少なくする恐れがある。そこで、ロールレタリング実施の最初に、「往」では質問し、「復」ではあえて反論を入れてみるように指示することなどの工夫が有効であると考えた。テキストを執筆した人がどのような気持ちでいるのか、当事者としての立場を想像できるような「復」の書き方を模索し、ロールレタリングの共有の仕方学びが深まるようにする工夫の有効性を指摘した。

受講生が言語生態を見直し、その保全、逆規定へと向かおうとする意志の醸成過程は、言語生態学の抽象概念と逆規定の実践者の具体例としての「群像」を関連付ける教材やグループ議論、思考の深化を促す振り返りとそれに対する教員・受講生のコメントに支えられていたことがわかった。(学会発表 に詳述)

大学生対象の日本語副専攻科目では、グローバル化社会における自らの立ち位置や生き方を紡ぎ出すために、「世界認識：世界はどうなっているか」「行動基準：その中でどのように生きていくか」「人間関係：他者とのような関係を築いていくか」「アイデンティティ：私とは何か」の4つの問いに答えていくようにした。言語生態の保全を促すために他者と「4つの問い」を問い返す過程は、過去から現在に至る言語生態のありようを捉え直し、改善・変革していこうとする歩みである。これは岡崎(2013)が言う「逆規定」であり、「過去・現在から投げ込まれてくる現実を規定し直し、未来に向かって投げかえず」ことである。

受講生の大学生は「小学校から大学まで教育を受け、新卒で就職する。」や「世界が一部の人たち(偉大な起業家、政治家)を中心として世界は回っている。」といった、一般的で受動的なイメージでしか、グローバル化社会やそこに生きる自己を規定できずにいた。こうしたイメージをより能動的なものにするため、自らの行動によってグローバル化社会のあり方を変えようとしている先駆者たちのことばや映像を題材として、対話的問題提起学習とロールレタリングを行い、グループディスカッションをした。その結果、上述のようなイメージは「世界を動かす人にはなくても、自分ができることで、今より良い世界にし、逆規定して生きていきたいです。」「常識をただ受け入れるのではなく、自分がおかしいと感じたことに対して、行動を起こしたり考えたりしてみる。」など、受講生の過去・現在の言語生態のあり方に基づいた具体的なものとなり、また主体的に未来を変革しようとする逆規定の意志の胚胎が窺えた。

グローバル化の社会変動の下、食糧や雇用面での生活基盤の揺らぎや、世界の構造や生

起したリスクを理解し、その中で生きていくための手立てを講じるうえで重要になるのが、思考の起点となる「自己」であり、思考の手段となる「ことば」である。「自己」および「ことば」は、4つの問いに対して答えるうえでも認識の核となる。そこで、プログラムを通して受講者がどのような「自己」と「ことば」へのイメージを紡ぎうるか検討した。(学会発表 に詳述)

プログラムに用いる教材としては、以下のような素材選びの基準を設定した。

「自己」への理解が深まるものとしては、グローバル化社会における多様な「当事者」の立場に立って考えられる素材や、自己のこれまでの経験が生き、等身大の自分として声を発することができる素材を選ぶこととした。そして、「ことば」への理解が深まる素材には、日本語教師に必要な知識・用語の辞書的な語義を受身的に理解するのではなく、グローバル化社会に生きる一員として能動的に獲得するのを促進する素材を選ぶこととした。

上のような条件を満たすものを検討し、留学生の就職活動ドキュメンタリーを用いることとした。就職活動中の留学生、国にいる留学生の母親、就職活動アドバイザーの3者のいずれかに対して手紙を書き、その人になりきって自分宛に返事を書くロールレタリングの活動を行った。

学生の一人は、自らも留学生として中国から日本に来日しており、日本での就職を目指しているという立場から「国にいる留学生の母親」へのロールレタリングを書き、その中で、「娘が異国で就職をしてしまうのは寂しいと思いますし、きっと自国に戻って就職することを一度は勧めたでしょう。そして、娘はアジアでもトップな大学の学部を卒業し、3ヶ国語を話せるにもかかわらず、日本ではアクセントの理由で就職できないということに不満を感じると思います。」「以前日本と全く縁がなかった場合、娘が日本で定住しても、なかなか会いに行けない現状があると思います。留学生を受け入れる際、そのご家族への手当も行政が考えていかなければ、本当のいい人材を呼び込むことは難しいのではないかと思います。」という、グローバル化社会に生きる多様な他者に対する想像力が発揮された「ことば」、想像力の基点となる「自己」を再確認できていた。

次に、(2)日本語教師の自律研修での成果を報告する。

本研修は、異なる職場に属する3名の日本語教師による自主的な集まりである。実践の場を異にする3名が、研修の時に集合し、互いの実践を語り、そこでの気づきを振り返りあう場であるため、自分自身の相対化、視野の拡大、新たなモノの見方の獲得などが進行する「越境的な学習の場」(長岡 2015)と位置付けることができる。

本研究では越境的な学習の場としての対話的問題提起学習とロールレタリングで何が語られ、それによって場はどのような場として成立しているのかを明らかにすることとした。(雑誌論文 に詳述)

3名の日本語教師の対話を分析した結果、日本語教師が普段活動している実践の時空間で生じた実践知が、対話的問題提起学習とロールレタリングによる書く・読む・対話するという言語活動を経て対話の時空間に持ち込まれることにより、経験から養われた具体的な知識や考え方である「持論」が言語化され、持論の統合であり、仕事の熟達化を支える知識である「実践知」の可視化に至っていることがわかった。(図1参照)

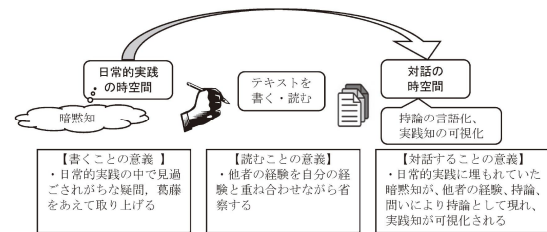


図1 本プログラムでの学習の構造

5年間にわたる活動の蓄積から、対話的問題提起学習とロールレタリングを、以下のように6つのステップに集約して実施するようになり定式化できた。(学会発表 に詳述)

テキストを共有し、その内容を個人で検討する

互いが検討した内容を持ち寄り、対話する
自他のものの見方を再検討する

テキスト中の対象に対して手紙(往)を書く

往を受け取った人になりきって返事(復)を書く

互いの書いた手紙を持ち寄って対話する

自律研修は、時間や場所の設定に苦慮することが想像されるため、実施しやすさの点から、簡便であることが求められる。比較的実施の容易な会のあり方は、勉強会や購読会、おしゃべり会などでも実現できるが、そうした会のあり方と本実践は以下のように差異があることがわかった。

表2 本実践と他の会との比較

	勉強会・購読会	自主研修(本実践)	おしゃべり会
話題	アカデミックなテーマ、教育現場の課題	形式に添いつつも、主体的な話題選択	散漫にもなりがちな近況報告
自己開示	「個人情報」として保護され、制限される	価値観・アイデンティティを含む自己開示	自由だが偏りもある自己開示
開催頻	単発/連続的開催	定期的開催	散発的開催
	やがて	これまで5	やがて

信頼関係のある対等な仲間で、対話的問題提起学習とロールレタリングの手法に添いつつ活動したことにより、フォーマルな勉強会とカジュアルなおしゃべり会の中間的な、ある種の緩さと緊張感を保持した枠組みが形成されたのが、本実践の特徴であった。活動の中では、各自が主体的に話題選択をし、価値観・アイデンティティを含む自己開示ができていた。

<引用文献>

岡崎敏雄(2009)『言語生態学と言語教育』凡人社
岡崎敏雄(2013)「生態学的意味論 主体的意味論としての生態学的意味論」『日本語と日本文学』55, 1-21.
岡崎敏雄・西川寿美(1993)「学習者のやり取りを通じた教師の成長」『日本語学』12(3)、明治書院、31-41
岡本泰弘(2007)『実践ロールレタリング』北大路書房
唐澤麻里・小浦方理恵・鈴木寿子(2013)「持続可能な生き方を考えるための日本語教師研修の提案 対話的問題提起学習とロールレタリングの協働実践」『言語文化と日本語教育』46,31-38.
鈴木寿子・トンプソン(平野)美恵子[他](2012)「言語生態学に基づく日本語教師養成プログラムの構築とその可能性 運営メンバーによる内省の分析から」『言語文化と日本語教育』43,11-20.
長岡健(2015)「経営組織における水平的学習への越境論アプローチ」香川秀太・青山征彦(編)『越境する対話と学び 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』第3章、新曜社、65-81.
文化庁(2015)「平成27年度国内の日本語教育の概要」
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h27/pdf/h27_zenbun.pdf
Wallerstein, N. (1983). Language and Culture in Conflict. New York: Addison-Wesley Publishing Company, Inc.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

鈴木寿子、トンプソン(平野)美恵子、房賢嬉、張瑜珊、劉娜、人間の福祉を志向する日本語教師養成論のための実践研究 言語生態学の観点から、言語文化教育研究、査読有、第12巻、2014、pp125-147、
<http://doi.org/10.14960/gbkkg.12.125>

小浦方理恵、鈴木寿子、唐澤麻里、自律的教師研修としての対話的問題提起学習 協

働による教師の実践知の語りに着目して 麗澤大学紀要、査読有、第99巻、2016年、pp25-34.

〔学会発表〕(計 5件)

鈴木寿子「日本語教育学科目におけるロール・レタリングの実践 手紙の展開に着目して」早稲田大学日本語教育学会 2014年秋季大会、2014年9月13日、早稲田大学(東京)

小浦方理恵、鈴木寿子、唐澤麻里「日本語教師間のロールレタリングの実践 協働による教師研修デザインを目指して」協働実践研究会、2015年9月5日、チュラーロンコーン大学(タイ・バンコク)

トンプソン美恵子、鈴木寿子「日本語教育副専攻科目で何が出来るか 自己の言語使用を見つめなおす」早稲田大学日本語教育学会、2015年9月13日、早稲田大学(東京)

鈴木寿子、トンプソン美恵子「日本語教育副専攻科目に置ける受講生の学び グローバル化社会における「自己」と「ことば」への理解を深めるための活動」第22回大学教育研究フォーラム、2016年3月16日、京都大学(京都)

鈴木寿子、小浦方理恵、唐澤麻里「自律的成長のための教師研修デザイン 対話的問題提起学習とロールレタリングを行った5年間の継続的協働実践」第11回協働実践研究会、2017年2月25日、早稲田大学(東京)

〔図書〕(計 1件)

鈴木寿子「比喩に込められた認識や信念、その変容を探求する 「共生日本語教育」をめぐる比喩精製課題とトライアングレーション」 pp201-220、館岡洋子(編)『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』、2015年、393頁

〔その他〕

鈴木寿子、小浦方理恵、唐澤麻里(共編)『自律的成長のための教師研修デザイン 対話的問題提起学習とロールレタリングの継続的協働実践』、2017年、88頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木寿子(SUZUKI, Toshiko)

早稲田大学・日本語教育研究センター・招聘研究員

研究者番号: 00598071